

## c-3 井の口山の台杉

### 日本一の台杉 い くちやま ふくじょうだいすぎ 井の口山の伏条台杉

京都の山中に台杉が放置された所が三カ所あり、芦生原生林と谷守杉がある片波川源流域、もう一つがこの井の口山だ。山頂直下に台杉群があり、その中で最も巨大な杉は伏条台杉という。地主さんが山が荒れるという事で、入山を拒んできた。取材の旨を伝えて、マスコミで発表しないという条件で取材した。

林道から道のない尾根を登り、標高 799m の山頂から標高差 50m 下った所に台杉群があり、その中で最大の株がこれだ。龍神杉とでも命名したいような、ど迫力がある。

地上 1~1.5m で 4 分岐し、分岐した幹はさらにそれぞれ 2,4,2,2 分岐する。上部は一本杉が林立する樹形で、枝は水平に出て先端は垂れる典型的なアシウスギ。幹の中にはお互いに連理するものもある。

これまで三回調査をして、伏条台杉と付近に点在する台杉は成立ちが異なる事が判ってきた。そもそも台杉とは、天然杉の主幹を切断する事によって分岐幹が多数立上がり、より多くの材を生産する方法。現在でも庭木に応用されている。杉苗を植林する方法が普及して途絶えた。

井の口山から片波川源流域の尾根には、小枝の伏条によって、根元で多数に分岐する樹形の幼樹が多く見られる。このような伏条スギは他の地域ではあまり見られない。伏条台杉は、このような伏条スギが巨大化したものと考えられる。幹の途中に伐採痕が見られ、一本杉として伐採したようだ。伏条の性質を利用して多分岐幹のスギ苗を作る事も考えられ、各地の神社境内に見られる分岐幹大杉のルーツの手がかりになる。

小枝が地面に倒れて伏条幹を多数発芽するケースは、先の芦生原生林の調査で、尾根に多く確認された。ところが、芦生では伏条杉が巨大化した例が全く見られない。巨大化したスギのほとんどは古株更新によるものであった。立地の関係で、幼樹の段階で枯れてしまうと考えられる。



井の口山の尾根にある伏条スギの幼樹。この場合、12本の幹が立上がっていた。倒れたスギの枝から発芽したの。



い くちやま ふくじょうだいすぎ  
 写真 D-014 井の口山の伏条台杉

▲尾根下よりの樹形

もともと根元10分岐していた幹が、お互いに癒着しながら成長した実生伏条樹形。大枝も変幻自在に湾曲し、植林された杉林ではありえない成長をとげている。幹の途中で伐採跡があり、再び何本かの幹が成長している。下部は材にならないが、上部の一本杉は材になった。下は尾根上側から見た樹形。

この尾根には多数に分岐した伏条の幼樹が多く見られるが、周辺にはなぜか成長した伏条杉がない。この事実は、伏条杉が巨大化する環境はかなり難しい事を物語っている。井の口山の伏条台杉は、人の手によって周囲を伐採し、日当りをよくして育てられたものではないだろうか。周囲30mに立ち木がない。



▲尾根上よりの樹形